

2020年5月10日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「神が共に」

聖書：コリントの信徒への手紙一12:27～13:13

コリント 13 章は有名な「愛の賛歌」と呼ばれるところ。そこだけを見ずにその前の文脈から見ていくとこの“愛”が、何について語っているのかが見えてくる。12 章 27 節からの内容は、教会の中に誰よりもすぐれた賜物を持った人たちがいて、その能力を誇って自慢していた人たちがいた。自分の賜物の方が偉いとか、優れているとか、そういういがみ合いが教会の中で起きていた。それに対して 13 章の言葉がある。パウロは、キリスト者は“何が出来るか”ということよりも、“何が与えられているか”ということに目を向けて行くことが大事であるという。

あるクリスチャンの詩に「つばきされて」という短い詩がある。

私にかわって つばきされたイエス様を／一日一ぺんぐらいは／思い浮かべたい

十字架を背負わされたイエス様は、つばをかけられ、侮辱されたと聖書は記す。そのイエス様を“一日一ぺんぐらいは”思い浮かべたいというわけだが、「一日一ぺん」なんてひどい、もっと思い起こすべきだよ！と言いたくなるが。ただどうだろう、私たちはイエス様をどれだけ思い起こしている者か？ どちらかと言うと、きれいな姿をしたイエス様を思い起こしていないか？ そう思わされた時に、この詩はずっしりと重い詩に思えてこよう。

この私のために、辱(はずかし)めを受けられたイエス。今なお、十字架へと追いやっているこの社会の状況に目もくれないこの者を、悔い改めをもってその姿を思い起こしたい。

最後に、今日は「母の日」。水野源三さんの詩を紹介したい。

「母が共に」(1969)

我ひとり悩むのでなく 母が共に／我ひとり聞くのでなく 母が共に  
我ひとり信じるのでなく 母が共に／我ひとり祈るのでなく 母が共に  
我ひとり喜ぶのでなく 母が共に／我ひとり待つのでなく 母が共に

母が共にいるからこそ、我があるということをこの詩に込めたもの。この詩には、もう一つ「共に」と言うべき方が込められている。もう一つ「共に」とは、「神が共に」という意味である。「我ひとり悩むのでなく 神が共に・・・」私たち一人ひとりには、永遠に変わらない神が共に居られることを覚えたい。

キリストは、私のために忍び、信じ、望み、私のために耐えてくださっているのである。そのキリストの愛に気づかされて歩ませて頂きたい。(神谷)